ハロー お仕事

映像作家

ろう者として伝えたい

耳が聞こえない人たちの音楽バンドや、東日本大震災で被災したろう者を追ったドキュメンタリー映画を作ってきた名古屋市在住の映像作家、今村彩子さん(三二)は、自らもろう者の立場で社会に発信しています。中学生記者は「世の中には耳が聞こえない人もいる」と伝える今村さんの使命感と、その仕事を取材してきました。

今村さんは手話通訳の人を交えて「自分でカメラを回し、パソコンで編集しています」と仕事の説明を始めました。編集する仕事場は自宅の一室で、大小二台のビデオカメラで撮った映像を、専用ソフトが入ったパソコンで編集し、DVDに仕上げます。

作りたい作品のテーマを決め、取材相手に出演交渉します。OKが出たら撮影に移り、どのようにすれば見る人に伝わりやすいか構成も同時に考えます。「台本通りのドラマではないので、結果は分からないし、不確定要素はたくさん」と今村さん。撮影中は良い作品ができるか不安と期待が交じります。

今村さんが撮った作品のチラシ

片手で手話をしながらカメラを回す今村彩子さん＝いずれも名古屋市緑区で

手話しながら撮影

右手にカメラを持ちながら、左手の手話で取材相手に語りかけるのが今村さんのスタイル。カメラを持った中学生記者は思わず「重い！」。左手で手話を試みると、右手も動いてしまって映像はぶれぶれに。今村さんは「私も長時間撮影していると腕が疲れるから、ジョギングなどで体を鍛えている」と笑います。

映像を撮ったらシナリオを考え、ナレーションを付けます。耳の不自由なサーフィンショップの店長と客とのコミュニケーションを追った最新作「珈琲とエンピツ」は一年半以上の取材で七十時間もの映像を撮りためました。それを一時間七分の作品にまとめるのは大変。編集作業にのめりこみ、気づいたら深夜ということもよくあります。

今村さんを取材する中学生記者たち

撮影した映像はパソコンで編集

震災被災地で取材

また、この作品を撮影中の昨年三月には東日本大震災が起こりました。連日流れるニュースを見ても「ろう者の情報が全く知らされていない」と、十一日後に被災地へ。被災者の声を集め、防災無線などの音声放送ではろう者に津波警報といった重要な情報が届かない問題をあぶり出す一方、近所の人に教えてもらって津波から逃れた良い事例も見つけました。

父親が字幕付きの洋画を借りてきてくれたのがきっかけで映画監督に憧れた小学校時代。自分も通った聾学校の日常を描いた最初の作品を二十歳で完成させると、「取材を通していろんな人、考え方に触れられ、世界が広がった」と事実に沿ったドキュメンタリーの制作へ心が移りました。今村さんは「これからも聞こえない人の存在を伝えていきたい」と力強く話しました。

取材に行って

「耳の不自由な人、目の不自由な人、外国人などにも平等に情報が伝わるようにしてほしいと言っていました」と、東日本大震災を取材した今村さんの考えに共感したのは熊崎君。肥田野君も「震災で被災したろう者について社会に訴えていくことを聞いて、強い使命感を感じた」と言います。横山さんは「この仕事で一番うれしいことは、伝えたいことが伝わった時だそうです」とやりがいが印象に残りました。

杉田さんは「相手の目を見ながら撮影しないと、本当の言葉が聞けないと言っていました」と振り返りました。安田さんは「自分の健康管理や、取材する相手への思いやりなど、小さなことの積み重ねですてきな作品に仕上がっているんだなあ」と感じました。

後藤さんは「耳の不自由なことから逃げず、逆にプラスに変え、強く生きている」と今村さんの姿に心を打たれていました。

今週の記者たち

名古屋・椙山女学園中3年　後藤友里奈
愛知県豊橋市・桜丘中3年　杉田　可蘭
愛知教育大付属名古屋中3年肥田野広己
岐阜県各務原市鵜沼中3年　横山わかな
津市橋北中2年　安田　翔子
愛知県東郷町東郷中1年　熊崎　斗吾

夢みるみんなへ

映像作家・今村さんから

私は一人で会社を立ち上げたので、撮り方の工夫や構成は自分自身で研究しなくてはなりませんでした。卒業した聾学校の先生に教えてもらうなど映像制作の技術の習得に苦労しました。技術は大学や専門学校でも学べます。自分で撮って編集したり、人からアドバイスをもらったりすることが大切です。映像を通して何かを伝えたい熱い気持ちと行動力があれば誰でもなれます。必要なのは誠実さと感謝の気持ちです。